

石井謙三

いしい・けんぞう

松永市長(初代)

経歴

生:明治32年(1899年)10月7日生まれ

没:(不明)

大正7年(1918年)	18歳	広島県立福山中学校(誠之館)卒業
—	—	第六高等学校卒業
大正14年(1925年)	25歳	東京帝国大学文学部英文科卒業
—	—	広陵中学教諭
—	—	熊本県済々黌教諭
昭和6年(1931年)頃	31歳頃	佐賀県武雄中学教諭 (出典2)
—	—	佐賀県佐賀中学教諭
—	—	山口県豊浦中学教諭
昭和17年(1942年)3月~21年(1946年)	42~46歳	山口県萩中学校校長
昭和22年(1947年)4月	47歳	松永町長
昭和29年(1954年)	54歳	合併により松永市となり、初代市長となる
昭和33年(1958年)	58歳	松永市長(再選)

生い立ちと学業、業績

明治32年10月7日松永町に生まれ、大正7年(1918年)福山中学校(誠之館)を出て第六高等学校に入り、大正14年(1925年)東京帝国大学文学部を卒業。

そして広陵中学教諭を振り出しに、熊本県済々黌、佐賀県武雄中学、佐賀県佐賀中学、山口県豊浦中学の各校教諭を歴任、最後は昭和17年(1942年)3月から昭和21年(1946年)まで山口県萩中学校校長として、実に21年間を教職に捧げてきた。

昭和22年(1947年)4月47歳のとき、無投票で初の公選町長として郷里の松永町に迎えられた。

以来、戦後地方行政の改廃変革に対処し、寧日なき活動をつづけた。
学制改革による六三制実施に伴い姿を消しかけた松永高校の存続問題では二十数回出県し運動が功を奏したことは記憶にも新しい。

その他、松永中学・母子寮の建設、災害復旧工事の施行、公民館の設置、図書館の整備、文化講座の開設、自治警察署の開廃、町制五十周年記念行事の完遂、松永駅に準急停車、松永湾干拓事業の促進、県立木履指導所の誘致などなど、地方産業、文化の発展に努めた。

その間郡の町村長会長、県下の町村長副会長に推された。

さらに多年懸案であった松永、今津両町の合併問題に取り組み、昭和28年(1953年)4月ついに実現するなど堅実に一步一步実績を積み上げてきた。

木履と塩田の二大特産を全国に知られた松永市は、昭和29年(1954年)3月31日に旧沼隈郡松永町を中心に本郷・東村・神村・柳津・金江・藤江の七ヶ村を合併して成立したものであるが、その初代公選市長として選ばれたのが石井謙三氏で、昭和33年の改選にも輿望を集めて再選され、二期引続いて市長をつとめた。

その新生松永市の初代市長選は、前松永町議会副議長の小田喜士夫氏が出馬の意思を固めたが、その頃旧町村長、町村議長らの一部から前松永町長石井謙三氏のかつぎ出し運動が起り、健康上の理由で固辞していた石井氏も健康診断の結果を見てようやく腰をあげた。そのとき無投票への潜行運動が拡がり、地元松永出身の内海得治郎県会議員、前松永町議村上寅義氏、これに金尾尾道商工会議所会頭、池永副会頭らが乗り出し、新生松永市政の将来に政治的対立のミゾを作ることをさけるとの理由で一応調停者に白紙一任で預け、小田氏は円満辞退の声明を発表し、石井氏の無投票当選が確実視されていた。

ところが市内青年層、労組筋の一部は、一部の有志によって工作は筋が通らぬと不満を抱いて小田氏を説得した。

加えて福山市草戸町の日野登氏が彗星のように出馬の意志を明らかにし、広島法務局福山支局に供託手続きを行なった。

さらに自ら「捨駒候補」と側近にもらしていた調停者の一人赤松徹氏が出馬をほのめかすに及び、形勢は反転また三転とあわただしい様相を呈し、その成行と一部支持層の積極的な応援に刺激されて小田氏は焦慮、ついに辞退声明の看板を降し一騎打ちと相なった。

この結果は周知のとおり石井氏に軍配はあがったが、「市長になろうとは夢にも思わなかった」と率直である。

その性格は微塵もハツタリがなく、堅実重厚さが市民から絶対的な信頼と支持を受けている所以である。

趣味は読書、スポーツ。 (出典1)

出典1:『政治産業文化備後総合名鑑』、式見静夫編、備後文化出版社刊、昭和34年9月

出典2:『福山学生会雑誌(第72号)』、100頁、福山学生会事務所編刊、昭和6年7月31日

2005年6月2日更新:本文・出典●2006年4月3日更新:タイトル●2008年2月13日更新:経歴・本文●2008年7月15日更新:経歴・出典●